

## 論文

## 早稲田大学における清国人留学生

孫 倩\*

## はじめに

1895年、日清戦争の敗北を契機として、清国政府は、西洋より東洋の日本を第一のモデルとして日本の各分野を学び始めた。その中では、留学問題も取り上げられるようになった<sup>1</sup>。

1896年から多数の清国人留学生が日本へと留学に訪れた。その人数は最初の13名から逐次増加し、1905年にはその最盛期を迎え、およそ1万人に及ぶ<sup>2</sup>。彼らは日本各地域にある留学生の教育機関で教育を受けていた。1907年、清国留学生指定学校は、早稲田大学、明治大学、法政大学、中央大学、東洋大学、宏文書院、経緯学堂、東斌学堂、成城学校、同文書院、東京実科学校、大成学堂、東亜公学、大阪高等予備学校、警監学校、東京警察学堂、東京鉄学堂、東亜鉄道学堂、実践女学校の19校である<sup>3</sup>。

本論では早稲田大学への留学生と、彼らの帰国後の人生軌跡を検討したい。

早稲田大学に留学した清末中国人については、実藤恵秀の「中国人早大留学小史」があるが、本書では、清末早大中国人留学生の中の著名な人物のみしか取り上げておらず、しかも、彼らの帰国後の履歴は詳述されていない。

また、安藤彦太郎の『未来にかけの橋 一早稲田大学と中国一』では、有名な3人の留学生（李大釗、彭湃、廖承志）を取り上げて彼らの留学時代を詳しく紹介している。さらに、『早稲田大学百年史』には、清末中国人留学生に関する内容が掲載されたが、その留学生の個人的な帰国後の動向を検討する余地があると思われる。

したがって、早稲田大学出身の清国人留学生を中心として、彼らが帰国後、中国の社会変革、日中関係にどのような影響を与えたのかという問題を追究したい。その際、実藤恵秀、安藤彦太郎などの研究を踏まえつつも、『早稲田大学百年史』、『早稲田大学学報』などの資料を利用して論ずることとする。

## 第1章 清国留学生部の留学生

## 1.1 清国留学生部の留学生数

初の早稲田大学への清国人留学生は唐宝鐸と戴翼翬<sup>4</sup>の2人であり、彼らは1899年に早稲田大学に入学した<sup>5</sup>。その後、早稲田大学に入学する清国人留学生が次第に増加した。1905年、早稲田大学は多数の清国人留学生を受け入れ、

\*早稲田大学大学院社会科学研究科 博士後期課程2年

彼らに大学レベルの教育をするために、清国留学生部という特設の清国人留学生に対する教育機関を設立した。この清国人向けの教育機関は1910年に閉鎖されるまで、多数の清国人留学生を迎えた。留学生数については、入学者は1905年762名、1907年850名、1908年394名である。卒業生は1906年327名、1907年381名、1908年182名、1909年176名となっている<sup>6</sup>。

ここで、卒業生の人数をまとめるために、次の「表1-1 卒業年、卒業人数統計表」を作成した。これを参照すると、卒業生は四年間の合計で1,066名<sup>7</sup>がいたことが判明する。

表1-1 卒業年、卒業人数統計表

卒業年	専門別/班別	人数	合計
明治39年(1906年) 清国留学生部豫科第一回卒業式	政法理財科	327	327
	師範科		
	商科		
明治40年(1907年) 清国留学生部豫科第二回卒業式	甲班	47	381
	乙班	37	
	丙班	50	
	丁班	40	
	戊班	39	
	己班	34	
	庚班	35	
	辛班	29	
	壬班	38	
	癸班	32	
明治41年(1908年) 清国留学生部師範本科第一回卒業式	物理化学科	94	182
	博物学科	41	
	教育及歴史地理科	47	
明治42年(1909年) 清国留学生部卒業式	物理化学研究科	43	176
	博物学研究科	17	
	教育及歴史地理研究科	20	
	物理化学科	55	
	博物学科	31	
	教育及歴史地理科	10	

(『早稲田学報』明治39年第137号P62-64、明治40年第150号P54-60、明治41年第162号P22-29、明治42年第174号P9-15より作成)

## 1.2 調査対象

本論では、この清国留学生部を卒業した留学生(上述の1,066名)を中心として、彼らの帰国後の諸活動を追究してみよう。

今回の調査では、その卒業生の中の139名<sup>8</sup>を追跡することができた。この人数は卒業生全員の僅かな数を占めたに過ぎず、そのため、卒業生全体の詳しい状況は説明できない<sup>9</sup>。しかし、今回の調査を通じて、判明できた範囲内で、この139名の卒業生は帰国してから、各領域でどのような活動をしたのか、中国の近代化にどのような影響を与えたのかを次の分析で解明したい。

## 1.3 調査方法

本論の調査方法については、以下の通りである。まず、『早稲田学報』(表1-1の出典を参照)に記載されている留学生の氏名を、インターネットで調べる。次に、中国の各地域が出版した地方誌<sup>10</sup>を通じて、その出身地を確認できた留学生の情報を得る。さらに、人物に関わる日記、伝記、著作などをも利用して本論の人物調査を行ってみる。

## 第2章 卒業生の出身地と専攻

### 2.1 出身地

各学年の統計から出身地が判明した卒業生の人数は、明治39年13名、明治40年30名、明治41年16名、明治42年30名、合計89名となっている。ここでこの89名の出身地をまとめてみよう。

その委細を述べると、浙江省27名、江西省10名、湖南省8名、四川省6名、安徽省6名、江蘇省5名、湖北省5名、河南省5名、山西省4

名、河北省2名、山東省2名、広西省2名、陝西省2名、北京1名、広東省1名、雲南省1名、貴州省1名、上海1名（人数順、太字：南方地域）、となっている<sup>11</sup>。

その中で、中国南方出身の学生（73名）が合計（89名）の82.0%を占めた。さらに、南方出身の学生の中では、浙江省出身の学生（27名）が37.0%を占めた。

それでは、なぜ南方出身の学生が一番多いのか。さらに、なぜその中で、浙江省が半数近くを占めたのか。

当時、日本留学の主唱者張之洞<sup>12</sup>は留学生派遣に積極的に取り組んでいた。彼は『勸学篇』<sup>13</sup>に、「留学の国といえは、西洋より東洋がいい。一、距離が近く、費用の節約ができ、多くの人数を派遣できる。」（至遊学之國。西洋不如東洋。一、路近省費。可多遣。）（翻訳 筆者 以下同）と述べているように、中国北方より南方のほうは日本へ行くのに距離がより近いから、便宜である。

また、張の身分から見ると、当時、彼は湖広総督<sup>14</sup>であったため、権力地盤は湖北、湖南の南方地域にあった。彼の上奏文「日本派遣留学生の名前、年齢、出身地について」（咨送派往日本遊學學生姓名、年歲、籍貫）（1898年11月23日）<sup>15</sup>によると、主に湖北省などの南方出身の人を選んで派遣していることがわかる。

さらに、清国の中央政府は北方にあるため、北方は中央権力にしっかり統制されていた。それに対して、南方は中央政府の統制が緩く、張之洞のような開明的官僚が活躍できる余地があった。その結果、南方を中心としての派遣が始まったものと考えられる。

それでは、南方出身の者の中で、なぜ浙江省出身の学生が一番多いのであろうか。呂順長

の『清末浙江与日本』でも、1897年-1910年の9年間に浙江省出身の清末留日学生が全国留日学生全員の10%を占めていることを指摘している<sup>16</sup>。その理由について、呂は二つの要因をあげている。一つ目は「近代における浙江での民族資本主義の発展にともない、浙江の維新運動を促した。そのため、浙江で自由な社会の気風を形成した」という点であり、二つ目は「杭州府知事の林啓などの地方有識者は教育事業を重視し、新学を提唱し、新式学校から学生を選んで日本へ派遣することに取り組んだ」という点である<sup>17</sup>。

したがって、中国南方、特に浙江省出身の留学生在が一番多い理由は、地域環境の整備と、地域有識者・官僚たちによる人材育成の重視などの条件が備わっていたからであると言える。

## 2.2 専攻

『早稲田大学学報』（明治38年7月発行 臨時増刊第120号）の中の「第十二章 清国留学生部章程」によると、予科の専攻は政法理財科、師範科（物理化学科、博物学科、歴史地理科）、商科という3種類がある。

本論では、明治39、40年の予科卒業生の内、28名<sup>18</sup>の専攻分野が調査で判明した。その内訳は政法理財科23名、師範科2名、商科3名である。この調査の範囲では、政法理財科を専攻した学生が一番多く、特に法律、政治経済を勉強した人が顕著である。法律を勉強した人は15名で、政治経済を専攻した者は7名であった。

同様のことは川島真も次のように指摘している。「1904年、張百熙が教員養成などのため留学生派遣を推進した。」「この時期には数千の日本留学者がいたが、その多くは政治、法律、師

範に集中した。』<sup>19</sup>

次に、明治41、42年の師範本科卒業生については、68名<sup>20</sup>を調べることができた。師範本科は物理化学科、博物学科、教育及歴史地理科という3種類がある。物理化学を専攻した人は36名、博物学を専攻した人は12名、教育及歴史地理を専攻した人は20名となっている。その中で、物理化学を専攻した人が全体の52.9%を占めた。それはなぜであろうか。

当時の社会背景に、その理由を求めることができる。川島真は以下のように述べている。「1904年に奏定大学堂章程によって物理学が教科化、大学にても物理学科設立が計画されたことが説明される。そのため、留学生は東京高等師範、早稲田清国留学生師範科、東京物理学校などで（物理・数学・化学）を学び、帰国後地方の教育機関などに勤務した」<sup>21</sup>とあるように、彼らは、当時の文科系中心の教育体制から理科系をも重視する教育体制に変換することに寄与したと言え、中国の理科教育の基礎に大きな役割を果たした。

### 第3章 帰国後の職業と経歴

本論の調査で帰国後の職業が判明した人数は117名（職業不明22名）であった。次にその117名の卒業生を対象として、彼らの従事した職業について検討してみたい。その内訳は、教育者70名、政治家43名、革命家16名、法律専門家7名、言語学者2名、文学者2名、歴史学者1名、経営者1名、実業者1名<sup>22</sup>（従事した職業は重複している人もいるため、合計は117名を越える）となっている。

各職業の人数順から見ると、教育者が一番目、次いで政治家が二番目、革命家が三番目、

法律専門家が四番目となっている。

それでは、各職業（上述した一番目から四番目までの職業）の中では、具体的な仕事の種類は何であったのだろうか。次に、教育者、政治家、革命家、法律専門家について、その詳しい内容を検討してみたい。

#### 3.1 教育者

まず、教育者70名の担当した職務を見てみよう。彼らの職務の類別を整理すると、校長は44名、教員は24名、教務主任は14名、書物を出版した人は13名、教授は11名、学校創設者は10名、教育局長・教育庁長は7名、新聞・雑誌の編集長は4名、図書館長は1名となっている。（職務は重複している人もいるため、合計は70名を越える）

その中で、著書を刊行した人物と書物の名前をここで「表3-1 教育関係者が出版した書物一覧」を作ってみよう。

表3-1 教育関係者が出版した書物一覧

名前	書物名
嚴慎修 <sup>23</sup> (明 39)	『郷村建設自治』
周鐘嶽 <sup>24</sup> (明 39)	編著『師範叢編』10巻、訳書『中国教育制度変遷通論』1巻、書物『法占安南始末記』など
汪東 <sup>25</sup> (明 40)	編集した『夢秋詞』（齊魯書社 1985）、付録の『詞学通論』、『鄭校「清真集」批語』など
黄尊三 <sup>26</sup> (明 40)	『三十年日記』全4冊（『留学日記』、『親交日記』、『修養日記』、『辦学日記』）
陳受中 <sup>27</sup> (明 40)	著作『行政法総論』、『瑞士国法論』、『地方自治要論』、『憲法講義大綱』、『三民主義講義大綱』；訳書『政治学説史』、『倫理学説之研究』
柳景元 <sup>28</sup> (明 41)	編纂『景寧県統志』
施普 <sup>29</sup> (明 41)	日本語の書物『代数』
薛德炯 <sup>30</sup> (明 42)	『題解中心算術辞典』科学技術出版社 1957、『英漢化学辞典』香港商務印書館 1971

王佩芬 <sup>31</sup> (明 42)	著作『国文積句公式』、『識字法』、『貴州方言考』、『説文解字部首疎証』、『名学淬速』、『先秦名理探』、『和文猎要』、『英語構造及分析図式』、『結晶学入門』; 訳書『増殖生物学』
朱鼎勳 <sup>32</sup> (明 42)	『空間解析幾何』上海科学技術出版社 1981
朱希祖 <sup>33</sup> (明 42)	『中国史学通論』
楊文洵 <sup>34</sup> (明 42)	『普通教育新地理(教科書)』8巻、『中学地理教科書』、『中外地理大全』12巻、『地理概論』など
馬伯援 <sup>35</sup> (明 42)	『東流信使』、『為辛十月記』、『我所知道的国民革命軍与国民党的合作史』、『棗陽県郷土志』、『三十三年剩話』など

(注 23-35 に付けてある各資料を参考に作成)

注: 括弧内は卒業年

出版された書物には、教科書、辞書、個人的な著作、日記、訳書など、さまざまな種類がある。朱希祖の『中国史学通論』は中国史学の発展を簡潔にまとめたものであり、これは大学のテキストとしても使用されたものである。楊文洵は地理教科書を執筆し、地理教育に貢献した。嚴慎修、柳景元は地域振興、地域建設のため、嚴は『郷村建設自治』を著し、柳は『景寧県統誌』を編纂した。陳受中は法律関係の書物を多数著し、中国の民主法制の発展に寄与した。薛徳炯の出版した『題解中心算術辞典』、『英漢化学辞典』は理系辞典として、幅広く利用されたものである。

このように、教育者は中国近現代の学校建設、学問研究、人材養成に貢献し、中国近代の教育事業の発展に力を尽くした。

### 3.1.1 代表的な教育者

ここで、代表的な教育者陳時を紹介する。

陳時(明治42年卒)(1891-1953)、湖北・武漢の出身である。光緒33年(1907)日本に留学し、1909年中国同盟会に加入した。留学時には、宏文書院、中央大学、早稲田大学、慶応大

学に在学した。法学学士を取得した<sup>36</sup>。1911年春、帰国した。辛亥革命後、湖北軍政府で財政司秘書を務めた。同年5月、彼の父親は中国での最初の私立大学武昌中華大学を創設し、陳の父親は初代校長となっている。1917年、陳の父親は逝去した。陳は父親の職務を受け継いで、その大学の校長となった。任期中(1917年11月-1945年8月)、八方手を回して南洋の華僑に呼びかけて資金を募り、援助を求めた。そのため、学校の規模は絶えず拡大し、付属の小学校、中学校、高校も建設し、大学にも文科、理科、法科、商科及び師範専修科などの専攻も設置した。学生は全員で2,000人程の規模であった。

陳は学校運営に「多くの事柄を包括・包容す」と主張し、「教育独立原則」を堅持していた。康有為、梁啓超、章太炎、李大釗、杜威などの国内外の有識者や学者を招いて、学校で授業した。

民国時期、教育部特種教育委員、世界教育会議委員、中国教育学会理事、湖北省議会議員、国民参政員、国大代表などを歴任した。

建国後、1951年、陳は湖北省第二回各界人民代表会議に参加し、政治協商委員と土地改革委員会委員を担当し、省人民政府委員に当選した。1950年、中国国民党革命委員会に加入した。1953年、病気で逝去した。陳の遺著としては、『政党論』、『南洋游記』などがある<sup>37</sup>。

陳時は中国の大学教育事業、革命事業に貢献した。二代校長として、父親が創設した私立武昌中華大学を運営し、国家の人材養成に力を尽くした。彼の教育思想「多くの事柄を包括・包容す」・「教育独立原則」は、早稲田大学の教旨の中の「学問の活用」・「学問の独立」と同じ内

容を含んでいる。ここから、彼の早稲田大学への留学経験がその教育思想に影響していることが読み取れるだろう。

私立武昌中華大学は中国で最初の私立大学として知られている。同校は中国の伝統的な私学教育を近代的な大学組織に改変し、近現代中国の国情に合う大学教育のモデルを創った。建国後、私立武昌中華大学は華中師範大学、武漢大学と合併した<sup>38</sup>。しかし、この大学の精神（「多くの事柄を包括・包容す」「教育独立原則」）は今でも中国一流の華中師範大学、武漢大学に伝わっている。

教育者の人数は最も多いため、上述した一人の例を詳細に挙げるのに止めた。ほかの教育者の情報は別稿で詳細に述べる予定である。

### 3.2 政治家

次、政治家の中で、1913年中華民国衆参議院議員に当選した人は22名であり、これらの人々は『早稲田大学百年史』の中で紹介されているので、本論では割愛する。それ以外の政治家の官職などを「表3-2 政治家の官職と略歴表」で説明しようと思う。

表3-2 政治家の官職と略歴表

名前	官職と略歴
谷鐘秀 <sup>39</sup> (明 39)	南京臨時政府参議院議員、憲法起草委員、段祺瑞内閣農商総長、全国水利局総裁などを担当
宋錬 <sup>40</sup> (宋教仁) (明 39)	中国同盟会中部總會を設立、湖南省都督府代表、国民党を組織、事実上の党首を担当
王印川 <sup>41</sup> (明 39)	国会衆議院議員、統一党理事、『国権報』編集長、衆議院秘書長、大統領府顧問、河南省省長、安徽省政府秘書長などを歴任
莫永貞 <sup>42</sup> (明 39)	浙江省臨時議会議長、国民党浙江支部委員、幹部参議、財政庁長、国憲起草会委員、浙江省自治法会議副主席などを歴任

向乃祺 <sup>43</sup> (明 40)	国会参議員、湖南省政府委員、国民政府監察委員、湖南省政治協商会常務委員、民革湖南省準備委員会副主任、省人民政治参事などを歴任
張善輿 <sup>44</sup> (明 40)	南京参議院参議員、国民党中央委員、衆議院委員、国民党河南省党部主任委員、省衆議院議員を歴任
董昆瀛 <sup>45</sup> (明 40)	湖北省臨時議會議員、議長、民国政府第一回国会参議院議員などを歴任
曾有瀾 <sup>46</sup> (明 40)	江西省第一回衆議院議員
曾幹楨 <sup>47</sup> (明 40)	江西省第一回衆議院議員
陳受中 <sup>48</sup> (明 40)	参議院議員、陝西省議会議長、山西省政府委員を担当
蕭增秀 <sup>49</sup> (明 40)	山西省議會議員
邱冠榮 <sup>50</sup> (明 40)	江西理財局局長、財政司主計科科长、衆議院議員を歴任
朱鴻鐸 <sup>51</sup> (明 40)	山東省初回の議会會員、山東堂邑県の知事、平原省政協委員、山東省政協委員、省人大代表、山東省文史館館員、湖西專署清案委員会委員などを歴任
汪東 <sup>52</sup> (明 40)	江蘇省長公署秘書、国民党政府監察院の監察委員、蘇州市人民代表、人民委員会委員、蘇州市政協常務委員会委員、副主席、江蘇省政協常務委員会委員、中国国民党革命委員会（略称：民革）蘇州市委員会主任、民革中央團結委員、民革江蘇省委員会副主任などを歴任
嚴端 <sup>53</sup> (明 40)	国民党広西支部部長、軍政府財政司、蘇皖贛稅務特派員、広東禁煙督察局総裁、中央財政部禁煙副主任、江蘇禁煙總局局長、段祺瑞政府政治會議広西代表、国民革命軍第七軍上海駐在の代表、上海中華民国製糖会社總經理などを歴任
羅家衡 <sup>54</sup> (明 40)	北京政府内務部長、中華民国軍政府での護憲委員、華東軍政委員会委員、上海法学会会長、市人民代表大会代表、市政協協商委員会常務委員、市文史館館員などを担当
潘鐘俊 <sup>55</sup> (明 40)	江西都督府秘書、龍、慶、景公学校長、景寧勸学所所長、県政府顧問、浙江省長顧問を担当。各界人民代表大会に出席
雷震 <sup>56</sup> (明 40)	国民党南京党代表大会主席团主席、教育部總務司司长、国民参政会副秘書長、政治協商会議秘書長、制憲大会の代表兼副秘書長、行政院政務委員などを歴任
夏嵩 <sup>57</sup> (明 40)	江蘇省第二回省議會議員、塩城県臨時参議院副参議長
柳景元 <sup>58</sup> (明 41)	浙江省議會議員、景寧県第一回人民代表大会常務委員会會員
馬伯援 <sup>59</sup> (明 42)	黎元洪の顧問、孫中山大統領の秘書、内務部會計主任などを担当

(注 39-59)に付けてある各資料を参考に作成)

注：括弧内は卒業年

以上21名の政治家の官職と略歴を挙げた。彼らの多くは地方議会の議員（莫永貞、柳景元、董昆瀛など）を担当した。国家または地方で重要な地位に就いた政治要人（王印川、向乃祺など）も少なくない。彼らは中国の政治改良、民主建設、国家発展などに取り組んだ政界の優秀な人材であった。

### 3.3 革命家

以下、革命家に関して、代表人物として宋教仁、湯増壁2人の履歴を紹介する。

#### 宋教仁（1882-1913）（明治39年卒）

宋教仁、湖南省桃源県に生まれる。幼少より私塾で学び、1900年には生員<sup>60</sup>の資格を得る。1903年に黄興と知り合った後は排満革命思想に目覚め、黄興、陳天華らと共に華興会を創設し副会長に選出された。1904年、西太后の誕生日に合わせ蜂起計画を立てるが清朝当局に露見し計画は失敗、同年末日本に亡命する。

#### 在日期間の革命と勉強

宋教仁の東京到着後の最初の活動となったのは、1905年1月3日に雑誌発行のための発起人会を開き、その総庶務となったことである。その雑誌はのちに『二十世紀之支那』<sup>61</sup>という名で刊行された。

『二十世紀之支那』は、1905年8月20日の中国同盟会の会合の席で黄興の提案により同盟会の機関紙と決定された。その後、『民報』と名を変えた。

宋と孫文との出会いは、日本での留学の時であった。宋を孫文と宮崎滔天に紹介した人物は程家樞である。程は1897年頃から東京に留学し

1904年農科大学を卒業した。留学中かねてより孫文、宮崎滔天らと親しく交際していた。7月19日、宋は程から滔天に紹介された。宮崎は「孫逸仙の人となりは志趣清潔にして心地光明、今どき世界にはこのような人は無い」と孫文を高く評価した<sup>62</sup>。

宋が孫文と会見した日は7月28日<sup>63</sup>である。日記には、その日の孫文との対話はほとんど記されていないが、孫文の革命についての考えを読み取ることができる。まとめると、①人材の団結、②各地方の聯合、③各国の侵略を心配するより、国内の内乱を治めるのを優先すべき、④両広（広東、広西）の革命勢力の重視という四つの革命に対する認識は、その後の革命活動の中で特徴的に顕われることになる。海外で留学生、亡命客などを集め、国内でも多くの優秀な人材も集め、彼らに革命思想を宣伝し、革命活動をさせる。外国の勢力をよく利用し、外国を根拠地として革命勢力を拡張させる。彼らが組織した武装蜂起も両広地域から始まった。

その日から、宋は孫文らと一緒に中国の革命事業に取り組んできた。ところで、D・C・プライス氏は「これまでの中国伝統の儒教的政治制度は古いものであり、これからは近代西欧型民主的議会政治を採用すべきである」という宋の思想的転換点は、日本に滞在して、勉強していた1906年頃であろう。」<sup>64</sup>と指摘している。その思想的転換期を知る上で、宋の留学期での学習状況を以下に具体的に見てみよう。

宋が日本滞在中、正規の学校教育を受けたのは1906年2月から7月まで、早稲田大学清国留学生部予科で勉強した期間だけである。在学中、宋は一日をどのように過ごしたであろう

か。1906年2月1日の日記によると、

「一日 くもり。辰初（午前七時），早稲田大学にいて授業を受けた。余が入ったクラスは留学生部予科の壬組<sup>65</sup>であり，すでに開講して三ヵ月あまりとなる。余はこのときはじめて出席したので各科目いずれも補習せねばならなかった。はじめの講義は数学であったが，余はあまり理解できなかった。巳正（十時），日本語の授業を受けた。程度はひじょうに低く，余は理解してなお余裕があった。午初（十一時），理科の鉱物の講義を受けた。正午に帰り，未初（一時），ふたたび学校にいて歴史の授業を受けた。西洋史である。未正（二時），ふたたび日本語を学び，申初（三時）に休憩し，申正（四時）になお一時間あって，また日本語の授業であった。余はいそいで帰って他の科目を補習しようと思ひ，すぐに帰った。」

「余の自修の日課は，毎日六時半に起き，洗顔，朝食。七時から新聞を読む。八時に読書。九時に学校にゆく。午後五時に帰る。六時になって夕食，散歩，静坐。六時以後は著述。八時に学科を復習。十時以後は思想的な学問の書物を読む（午前の読書は随意のものを読む）。日記をかき，十時半に就寝。」<sup>66</sup>

以上のように宋は学習の様子を記している。宋は途中入学であったので，学習の遅れを取らないように，懸命に励んでいた。当時，宋の日本語は授業のレベル以上を習得していた。ほかの科目も積極的に自分で補習した。さらに，毎日午後8時に，学科を復習する習慣も続けていたようである。

宋は大いに勉強に励んだ結果，好成績を修め

た。1906年7月20日予科を卒業した時に，卒業生総数327名中23番で点数は77.15である。途中入学したため，九組のうちの最後の壬組に入学したが，その組では一番の成績で卒業した<sup>67</sup>。

宋は，その後早稲田大学本科か東京帝国大学へ入学したいという希望を抱いていたようであるが<sup>68</sup>，神経衰弱で3ヵ月間入院したため，これを断念した。宋が大学で受けた教育はここで終わった。しかし，日本滞在中の勉強，研究，読書，翻訳などは，のちに宋の政治活動，革命活動の知識となって生かされることとなる。

1906年における宋の翻訳活動には西欧政治制度に関するものが7つある<sup>69</sup>。翻訳を通じて宋の政治活動の知識が蓄えられたと言えよう。また，彼が特に関心を持っていた地理や歴史分野での才能は，1908年に上海で出版された著書『閩島問題』において十分に発揮された<sup>70</sup>。

以上の点から見ると，中国で最初の民主的議会政治確立のために命をささげた宋にとって，日本滞在中の勉強は将来の彼の政治体制・国家体制の構想，革命の思想などに深い影響を与えたものと思われる。

湯増壁（1883-1948）（明治40年卒）：江西省萍郷県東橋郷の出身である。

#### 早稲田大学に在学中の活動

湯増壁は早稲田大学に在学の時，相当に活躍した学生であった。常に，中国人留学生集会で進歩的な言論を発表したため，革命党の注目をあびた。1905年，黄興，宋教仁の推薦を通じて，湯は中国同盟会に加入した。湯は 에스ペラント語にも散文にも詳しいため，中央機関報『民報』の副編集長に任命され，編集長の章太炎の手



助けをした。湯は革命宣伝のため、『人世之悲観』、『崇侠篇』、『哀政聞社員』、『陸軍学生之無告』、『亞洲和親之希望』、『革命之心理』、『湖広総督之滑稽』などの文章を発表した。その文章は国民を驚かせるほどの説得力があったため、孫文は湯の文章を称讃し、彼を代筆者として招いた。

### 日本に滞在中の革命運動

1907年8月、湯は張伯祥、孫武、焦达峰などの90名の革命党人と一緒に、革命をさらに推進するために、東京で進歩的な社団「共進会」を創設した。「共進会」の会員は革命の熱情にあふれて、当時日本に存在した中国革命組織の中で活発な行動をし、規模も一番大きい革命団体になった。同年、孫文、黄興は広西河口で武装蜂起をすと決定した。湯もベトナムのハノイへ戦争に赴いた。その後、清政府は湯が広西、雲南河口の武装蜂起に参加した情報を得て、彼を官費留学生から除名した。

1908年10月19日、日本政府と清政府とは協力しあって、東京警視庁に中国同盟会の機関報『民報』の発行禁止の命令を出したため、湯は宣伝媒体を失った。当時、革命者の陶成章から招聘されて、東京大成中学校付属中国人女子留学生講習所で国文教師をした。その間、湯は革命宣伝を諦めずに、自費で革命雑誌『江西』を創刊し、密かに清国内で発行した。

### 帰国後の経歴

#### 革命救国（1909-1913）

1909年、湯は共進会の呼びかけに応え、国に帰って、表向きは『北京報館』を装いながら革命宣伝、組織活動を密かに行ってきた。

1911年10月、全国的な辛亥革命が勃発した。11月2日、漢口が陥落した。湖北軍政府の存亡にかかわる瀨戸際に、軍政府は緊急会議を開いて、黄興は戦時総司令に選ばれ、湯は総司令秘書となった。清朝軍隊と激しく戦い、最終的には、勝利を得た。1912年1月1日、孫文は南京で臨時大統領になった。孫は黄興を陸軍総長に任命し、湯は黄興総長の秘書になった。1913年、袁世凱は国民党の組閣を阻むために、国民党のリーダーである宋教仁を暗殺した。湯はマスコミで袁の独裁統制を批判した。湯の宣伝を通じて、全国で「反袁革命」は拡大することになる。

#### 毛沢東の師として（1914）

1914年、湯は湖南教育界の招待に応じて、長沙船山学社の教員となった。まもなく、湖南第四師範学校の国文教員となり、その間に学生に革命宣伝を行った。その後、湖南第一師範と湖南第四師範とは合併し、湖南省立第一師範と名を変えた。湯はその校長の張幹に国文教員として招かれた。学校では学生に中国、世界情勢及び『民報』に載っている政治関連の文章を講読し、さらに中国同盟会の宗旨と行動綱領を宣伝した。湯の影響を受けて、湖南省立第一師範の多くの学生は革命活動に身を投じた。その中で最も有名な学生が第八班の毛沢東、蔡和森などの愛国青年である。

そのため、毛沢東の政治的立場の形成は湯の教育と深く結びついていた。毛は湯先生との思い出を次のように語っている。

「この時期に、私の政治観も次第に形成された。湯という先生は常に古い『民報』を見せてくれた。私は興味深く読んだ。その新聞を通じ

て、同盟会の活動と綱領がわかった。」(在這個時期中，我的政治觀點也開始形成了。一位姓唐（湯增璧）<sup>71</sup>的教員常常給我一些旧『民報』看，我讀得很有興趣。從那上面我知道了同盟會的活動和綱領。)<sup>72</sup>

このように、湯は少年時代の毛沢東の革命思想、政治立場などの確立に深い影響を与えた人物として、注目される存在といえよう。この中華人民共和国の初代の主席は、後日アメリカ人記者のインタビューを受けた時、湯先生の教育を忘れないで、上記の回想をしたのである。

1915年、湖南の革命情勢が厳しくなり、湯は湖南省立第一師範の教員の職を辞し、『公民日報』、『贛江日報』の編集者を担当した。

#### 教育救国（1917から）

1917年から、湯は長沙、青島などで教員となり、有名な教育者になった。1927年、李烈鈞の紹介で、湯は胡漢民に国民党中央執行委員会秘書として招かれた。1928年、蒋介石の独裁のため、湯は政界を離れて中央大学中国文学系で教授となった。湯はエスペラント語を学び、中国でのエスペラント語の普及に貢献した。

1945年、日中戦争後、湯は胡漢民の紹介で、国民党中央党史史料編纂委員会の編纂者、国史館の編修者、秘書となる。湯は国民党党史を記録するために、『同盟会時代民報始末』、『同盟感録』、『先烈軼事』、『革命匯聞』、『先烈伝記』、『革命実録』、『総理年譜』、『総理年譜別録』などの歴史著作を執筆した。1946年、国民党代表大会の代表に当選。1948年、病気で逝去した<sup>73</sup>。

上述した湯増璧の履歴を通じて、彼は早稲田

大学に留学して、日本での自由な環境を利用して、勉強しながら革命に参加したことがわかった。最初、彼が革命の影響を受けた時期は留学期間であり、彼の革命思想の形成、および革命運動の参加は留学経歴と深く結び付いていたと考えられる。

以上見てきたように、革命家の中では、同盟会、辛亥革命などに参加した人は少なくない。また、地方武装蜂起、反袁（袁世凱）闘争、護法闘争などの革命の中で、彼らの活躍が顕著であった。さらに、その中で、革命のため、犠牲となった革命家も多数存在する。彼らは中国の民主革命運動に大きな貢献をしたのである。

以上述べた2名の革命家以外、ほかの14名の革命家の履歴は別稿に載せる予定である。

#### 3.4 法律専門家

法律専門家はどうかであろうか。次の「表3-3 法律専門家関連資料表」を参照されたい。

表3-3 法律専門家関連資料表

名前	職務と略歴	出版物
李肇甫 <sup>74</sup> (明39)	臨時參議院全院委員會委員長，四川省臨時參議會議長，立法院立法委員，司法院大裁判官などを歴任	
周家堪 <sup>75</sup> (明39)	甘肅省檢察庁庁長，湖北省議會議員などを歴任	
熊錫晋 <sup>76</sup> (明40)		『公司法通詮』 商務印書館 1937
劉世長 <sup>77</sup> (明40)		『中華新法治国論』中華書局 1918
杭維斌 <sup>78</sup> (明40)	弁護士を担当	
孫觀圻 <sup>79</sup> (明40)	北平（北京）地方裁判所の裁判長，開灤炭鉱の法律顧問などを歴任	
羅家衡 <sup>80</sup> (明40)	上海で弁護士事務室を創立し，弁護士の仕事に従事。上海法学会会長を担当。	

(注74-80に付けてある各資料を参考に作成)

注：括弧内は卒業年

以上調査できた法律専門家は7名であった。その中では、法律学者が2名であり、彼らは法律関係の書物を出版した。ほかには、弁護士となった人は2名、検察庁長は1名、裁判所の裁判長は1名、立法院立法委員、司法院大裁判官は1名である。彼らは中国の法律分野で高い地位につき、中国の法律制度の整備に尽力したのである。

以上、職業構成人数順による一番目から四番目まで（教育者、政治家、革命家、法律専門家）に関する分析である。それ以外の言語学者、文学者、歴史学者、経営者、実業者などの職業に従事した留学生たちも各分野で活躍したが、ここでは詳しく紹介しない。

#### 第4章 革命結社—中国同盟会の会員

本論で調査した卒業生139名の中では、不明を除いて、30名が中国同盟会に加入した。

表4-1 同盟会会員関係資料表

名前	出身地	革命経歴・経歴	職業
宋鍊 (宋教仁) (明39)	湖南・桃源	中国同盟会の創設者の一人	革命家・政治家
李積芳 <sup>81</sup> (明39)	湖南・平江	革命活動に参加	革命家・政治家
丁厚扶 <sup>82</sup> (明39)	四川・榮県	留学生総会調査科幹事、同盟会四川支部入会紹介者	革命家
段世垣 <sup>83</sup> (明40)	河南・義馬	『豫報』、『河南』雑誌を創刊し、革命思想を宣伝	教育者・革命家
張善輿 (明40)	河南・新郷	孫文の秘書を担当	革命家・教育者・政治家
文群 (明40)	江西・萍郷	革命活動に参加	政治家
蕭增秀 (明40)	山西・文水	革命活動に参加	教育者・革命家・政治家
朱鴻鐸 (明40)	山東・単城	革命活動に参加	政治家
汪東 (明40)	江蘇・蘇州	同盟会機関報『民報』の編集長を担当	革命家・政治家・文学者・書道家・教育者

羅家衡 (明40)	江西・吉安	革命活動に参加	法学専門家・弁護士・政治家
潘鐘俊 (明40)	浙江・景寧	革命活動に参加	革命家・政治家
黄格鵬 <sup>84</sup> (明40)	江西・清江	同盟会江西支部を設立	革命家・政治家
光昇 <sup>85</sup> (明40)	安徽・桐城	革命活動に参加	教育者
湯增璧 (明40)	江西・萍郷	中央機関報『民報』の副編集長を担当	革命家
劉裕堪 <sup>86</sup> (明41)	安徽・霍山	同盟会東京支部の中堅幹部を担当	教育者
曾果能 <sup>87</sup> (明41)		革命活動不明	教育者
黄人望 <sup>88</sup> (明41)	浙江・金華	革命活動に参加	教育者・政治家
潘才華 <sup>89</sup> (明41)		革命のために、マカオで培基兩等小学堂を創設	教育者・革命家
柳聖元 (明41)	浙江・景寧	革命活動不明	教育者・政治家
周志由 <sup>90</sup> (明42)	四川・広利郷	革命活動に参加	教育者
葉正度 <sup>91</sup> (明42)	浙江・湖頭郷	革命活動に参加	教育者
蔡漱芳 <sup>92</sup> (明42)	江西・湖口	革命活動に参加	教育者
崔鎮岳 <sup>93</sup> (明42)	山西・汾陽	革命活動不明	教育者
陳時 <sup>94</sup> (明42)	湖北・武漢	革命活動に参加	教育者
錢適鵬 <sup>95</sup> (明42)	四川・錦江	清政府打倒を目指して革命に参加	教育者
藍経惟 <sup>96</sup> (明42)	四川・渠県	留学生に革命を宣伝	教育者
馬伯援 (明42)	湖北・棗陽	黎元洪の顧問などを担当	革命家・政治家・実業者・教育者
葉慶崇 <sup>97</sup> (明42)	浙江・松陽	浙江省幹事などを担当	教育者
余光凝 <sup>98</sup> (明42)	浙江・淳安	雲南省で革命活動に参加	教育者
程景曾 <sup>99</sup> (明42)	浙江・景寧	革命活動に参加	

(注81-99に付けてある各資料を参考に作成)

注：括弧内は卒業年

注を付けない名前に、表3-1、3-2、3-3を参照

以上の挙げた表4-1のように、同盟会で職務を担当した人や地方革命活動に参加した人、革命雑誌を創刊したことを通じて革命思想を宣伝した人など、それぞれの革命経歴をもっていた人がある。彼らは中国の革命運動、社会改良などに貢献した。

職業から見れば、同盟会会員の中で、教育者

は12名、革命家は2名、政治家は2名、革命家・政治家は4名、教育者・革命家は2名、教育者・政治家は2名、法学専門家・弁護士・政治家は1名、革命家・政治家・文学家・書道家・教育者は1名、教育者・革命家・政治家は2名、革命家・政治家・実業者・教育者は1名となっている。

同盟会会員の中では、教育者が一番多く、2位にあるのが革命家・政治家である。

出身地について表4-1を参照しつつ、全体的な卒業生の出身地は中国南方により多いという調査結果とをあわせて考えると、同盟会会員の中でも中国南部出身の人が多くは一目瞭然であろう。これもなぜ辛亥革命をはじめ、中国の近代革命が主に南部地域から起こったかという理由の一つとなるであろう。

## 第5章 清末留日学生の役割

ここまで、早稲田大学出身の清国留学生について分析した。本章で早稲田大学出身の留学生をはじめ、清末留日学生の担った役割をまとめたい。

### 5.1 中国の社会変革への土壌を形成

近代中国が社会変革の激流においては、各領域にさまざまな人材が登場した。留学生は社会変革の要素の一つとして大切な役割を果たした。

1913年2月25日、孫文は早稲田大学にきた時に、「二十年前我が留学生は専ら米国に学びしも、多数は失敗に終って帰り、次で貴国に多数青年子弟留学の風潮を示し、其数最も多き時には実に二万を超え、而も早稲田大学に教へを受

けし者多数を占む。是等学生が帰国後各省に散在して日本の思想と維新大業とに学んだる所を大に鼓吹せし結果、遂ひに這般の政治革命を成し遂げ今日あるを得たり。而も破壊は一時にして為し易きも、建設は幾十百年を要して甚だ為し難し。即ち革命は初め貴国の思想に依って成されしもの故今後また貴国の教を俟て啓発すべきもの多し」<sup>100</sup>（句読点筆者）と述べたように、中国の近代化の改革の中で、留日学生の果たした役割を重視しなければならない。早稲田大学出身の留学生を例として彼らが果たした役割をここでまとめよう。

#### 教育者・学者

本論の調査した範囲で、早稲田大学出身の留学生のうちで最も人数が多いのは教育者である。教育者は中国国内の各学校で人材養成、啓蒙活動などに取り組んでいた。彼らの中では、多くの人たちは実際の生徒の教育、著書・訳書の出版、学問の研究などに従事し、中国の近代教育に寄与した。

#### 政治家

国家・地方議会の議員を担当した人が少ない。また、国家・地方で重要な地位に就いた要人も少なくない。彼らは中国の政治改良、民主建設、国家発展などに取り組んでいた。

#### 革命家

1900年代前後、清朝は次第に衰退していく中で、西洋列強および日本は中国に侵略政策を立てた。このような時代に国難を打開するために、各階層による革命運動も進行する。中国国内はもちろん、海外の留学生たちも革命運動に参加した。本論の調査を通じて、早稲田大学出身の留学生の中で、革命に参加した者も少なくない。多くの人々は中国同盟会に参加し、直接

に革命運動に参画することによって、中国の民主革命運動に多大な貢献を果たした。

#### 法律専門家

中国が近代法制社会に転換する段階には、専門家の養成、特に法律関係の人材の出現が重要な意味を持っている。彼らは中国の法律制度の完備に貢献した。本調査を通じて、早稲田大学出身の留学生をはじめ、中国の社会変革への土壌を形成したことがわかる。彼らは変革の中の必要な人材として、国家改革に尽力した。

清国留学生部は師範教育と実業教育を授けるというのを目的として創設されたにもかかわらず、政治家や革命家、法律専門家など中国の革命運動に寄与した人材が多数存在することは大きな特徴の一つとなるだろう。つまり、清朝側の意図に反した結果となったわけである。

## 5.2 早稲田大学と中国との密接な関係

「早稲田大学。この大学ぐらい中国で名の知られた外国大学はほかにないだろう。それには名前も有利さも働いている。慶応、明治と聞いても何のことかわからないが、早稲田というと、中国人にとっては何か失われたふるさとを想うような、温かななつかしさが感ぜられるらしい。」<sup>101</sup>

とあるように、なぜ早稲田大学は中国で有名なのか。大隈重信の「東西文明の調和」などの政治的な主張の影響以外に、早稲田大学での独特な中国研究、中国語教育などの中国を重視する学術的な雰囲気もその要因の一つかもしれない。さらに、清国留学生部の設置、及び早稲田大学出身の留学生の帰国後に果たした役割も重視しなければならないだろう。本論で留学生の活動を検討することにより、早稲田大学が中国

で著名である理由を考えてみたい。

早稲田大学の前身は1882年大隈重信が創設した東京専門学校であり、1902年現名に改称した。第1章で述べたように、1899年に早稲田大学は最初の2人の清国人留学生を迎えた。開校よりわずか17年後、清国人留学生の受け入れが始まったのである。つまり、現在までにおよそ110年の歴史があることになる。

本論では、1900年代前後の清末、早稲田大学が最初の留学生を受け入れた時期の清国留学生を中心として述べた。

本論の調査で、早稲田大学出身の清国留学生は帰国後、多分野で中国の社会変革に寄与したことが明確になったものと思われる。彼らの影響力は社会変革の各領域に及んでいたため、彼らの出身学校もそれに伴って、有名になったと推測できる。たとえば、中国教育事業の先頭に立った早稲田大学出身の留学生たちは教育界で活躍し、彼らの生徒たち及び生徒の親族たちは早稲田大学の名を知るはずである。さらに、その先生は生徒の人生に深い影響を与えると、生徒と親族は先生を尊敬し、その出身学校にも好印象を抱くだろう。毛沢東の先生の湯増壁（明治40年清国留学生部卒業生）は、毛に深い思想的影響を与えた。毛は後に中華人民共和国の初代主席として、早稲田大学との交流を重視した。

また、安藤彦太郎は中国の訪日学術代表团と早稲田大学との関係について、次のように記している。

「1955年12月1日、郭沫若先生を団長とする15人の訪日学術代表团が来日したが、これは日本の学術会議が招いたもので、新中国成立後はじめての公的な学術代表团であった。しかし当時の日本の文部省は各国立大学にその接待をし

ないように命じた。大浜総長はその代表団を取  
 えて早稲田に迎えたのである」<sup>102</sup>。

このように、新中国が成立してまもなく、早  
 稲田大学との学術的な交流も始まった。その推  
 進者は清国留学生部卒業生湯増璧の学生毛沢  
 東、留日学生であった郭沫若、当時早稲田大学  
 総長の大浜信泉などである。

早稲田大学と中国との密接な関係の形成に、  
 清末留学生が大きな役割を果たしていたのである。

## おわりに

本論では、先行研究においてまだ検討の余地  
 がある留学生の帰国後の諸活動を主眼として、  
 早稲田大学出身の清国人留学生に関する追跡調  
 査を行った。

早稲田大学出身の留学生をはじめ、清末留日  
 学生は中国の社会変革への土壌を形成したこと  
 が明らかとなった。早稲田大学出身の留学生を  
 始めとして各領域の人材がさまざまな領域で活  
 躍し、中国の社会改革にそれぞれ尽力した。さ  
 らに、彼らは日中関係における架け橋の役割を  
 果たした。第5章に書いてあるように、早稲田  
 大学と中国との密接な関係について、留学生が  
 担った役割が大きいことが明らかとなった。こ  
 の点を敷衍して考えると、近代日中関係全体に  
 おいて留学生の役割が大きいものであったこと  
 が推測できるだろう。この点を今後の更に掘り  
 下げて検証したいと思う。

[投稿受理日2012.8.24/掲載決定日2013.1.24]

## 注

- 1 阿部洋『中国の近代教育と明治日本』福村出版株  
 式会社 1990 P54
- 2 『早稲田学報』明治41年第162号 P22

- 3 『法律新聞』第407号 明治40年2月15日
- 4 唐宝鏐と聶翼翬は1896年、清政府が日本に派遣し  
 た最初の13名の留学生の中の2名である。  
 唐宝鏐(1878-1953)：上海に生まれる。1905年、  
 早稲田大学政治経済学部を卒業した。後に法律専  
 門家として中国で活躍した。  
 聶翼翬(1878-1908)：湖北隕陽府房県の人。1905  
 年、早稲田大学を卒業した。帰国後、訳者、言語  
 学者として活躍した。
- 5 「在本邦清国留学生関係雑纂」日本外務省記録3  
 門-10類-5項
- 6 『早稲田学報』明治39年第137号 P62-64, 明治40年  
 第150号 P54-60, 明治41年第162号 P22-29, 明治  
 42年第174号 P9-15 (各学年卒業生の名簿も付き)
- 7 本論の調査を通じて、その学報に載っている1,066  
 名の卒業生の名簿の中に、重複している留学生の  
 名前はかなりある。たとえば、豫科を卒業した留  
 学生はさらに進学する場合、彼らの名前は豫科卒  
 業生の名簿に入っていると同時に、本科卒業生の  
 名簿にも入っている例は多く存在している。その  
 ため、実際的人数は1,066名を下回ると思う。
- 8 本論で調査した139名の留学生の名簿と詳細な情  
 報は分量が多くて、本論で割愛する。ただし、そ  
 の中から、代表的な人物だけを取り上げて分析す  
 る。また、この139名の卒業生の中には、注6で説  
 明したように、二回以上卒業した人が、139名の中  
 に63名を占める。本論で最後の卒業を準拠として、  
 139名の卒業生が存在していた。本論ではそれら  
 を対象に分析する。
- 9 ここで追跡できた人物のみを、対象としているた  
 め、正確さには欠けるが、おおよその傾向は読み  
 取ることができると思う。
- 10 土地の歴史や沿革について記した書物
- 11 こちらのデータは筆者が調べて取ったものである  
 ため、詳細な情報は別稿に載せる予定
- 12 清末の政治家。洋務派官僚として重要な役割を果  
 たした。曾国藩、李鴻章、左宗棠とならんで、「四  
 大名臣」とも称される。
- 13 張之洞『勸学篇』中江書院 1898
- 14 中国清王朝の地方長官の官職名であり、湖広省  
 (湖北・湖南省)の総督として管轄地域の軍政・  
 民政の両方を統括した。
- 15 趙德馨、呉劍杰、馮天瑜『張之洞全集 第六巻』  
 武漢出版社 2008 P192

- 16 呂順長『清末浙江与日本』上海古籍出版社2001 P72
- 17 同上 P76
- 18 この28名の委細は別稿に載せる予定
- 19 川島真『近代中国における物理学者集団の形成』日本橋報社 2003 P187
- 20 別稿で詳細を述べる予定
- 21 川島真『近代中国における物理学者集団の形成』日本橋報社 2003 P187
- 22 こちらのデータは筆者が調査して取ったものであるため、その委細を別稿に掲げる予定
- 23 中国・萬栄県政府ホームページ 2011, 8 (アクセス日時 以下同)
- 24 周鐘嶽\_\_百度百科<http://baike.baidu.com/> 2011, 6
- 25 『蘇州市志』江蘇人民出版社 1995 P842
- 26 『瀘溪県志』社会科学文献出版社 1993 P571-572
- 27 『清徐県志』山西古籍出版社 1999 P849-850
- 28 『景寧畬族自治県志』浙江人民出版社 1995 P554
- 29 百度百科<http://baike.baidu.com/> 2011, 6
- 30 常州高級中学ホームページ 2011, 8
- 31 王佩芬\_\_百度百科<http://baike.baidu.com/> 2011, 8
- 32 贛州市第四中学<http://baike.baidu.com/> 2011, 7
- 33 王德堅『海塩県志』浙江人民出版社 1992 P932
- 34 江山実験小学ホームページ 2011, 8
- 35 『棗陽志』中国城市経済社会出版社1990 P583-584
- 36 法学学士はどの大学で取得したのが調べた資料で判明できない
- 37 『武漢市志 人物志』武漢大学出版社1999 P162-163
- 38 『湖北省志 教育』湖北人民出版社1993 P550-553
- 39 『早稲田大学百年史』第二巻 P1104, 1106
- 40 『桃源県志』湖南出版社 1995 P575-577  
周棉『中国留学生大辞典』南京大学出版社 1999 P209
- 41 『早稲田大学百年史』第二巻P1104, 1106
- 42 莫永貞\_\_百度百科<http://baike.baidu.com/> 2011, 8
- 43 『早稲田大学百年史』第二巻 P1104, 1106
- 44 『新郷県志』三聯書店 1991 P251
- 45 『早稲田大学百年史』第二巻 P1103, 1106
- 46 『早稲田大学百年史』第二巻 P1104
- 47 同上
- 48 注27を参照
- 49 文水名人<http://www.318w.com/> 2011, 9
- 50 『早稲田大学百年史』第二巻 P1104, 1106
- 51 朱鴻鐸\_\_百度百科<http://baike.baidu.com/> 2011, 7
- 52 注25を参照
- 53 『昭平県志』広西人民出版社 1992 P550
- 54 周棉『中国留学生大辞典』南京大学出版社 1999 P269, 『早稲田大学百年史』第二巻 P1104, 1106
- 55 『景寧畬族自治県志』浙江人民出版社 1995 P553
- 56 『長興県志』上海人民出版社 1992 P821-822, 周棉『中国留学生大辞典』南京大学出版社 1999 P423
- 57 建湖新聞網<http://www.jhxxw.gov.cn/> 2011, 9
- 58 注28を参照
- 59 注35を参照
- 60 中国で、明・清代の科挙試験をめざす学生
- 61 1904年、宋教仁は東京で『二十世紀之支那』というタイトルの雑誌を創刊した。これは後に中国同盟会の党報『民報』の前身となるものである。
- 62 松本英紀訳註『宋教仁の日記』同朋社 1989 P87-88
- 63 同上 P90-91
- 64 D・C・プライス「革命与憲法—宋教仁政治略的発展」『紀念辛亥革命七十周年學術討論會論文集』下冊 所収 中華書局 1983
- 65 同上 P453「留学生部予科の壬組：早稲田大学の清国留学生部は明治38年(1905)9月に開設され、本科と予科があった。予科は修学年1ヵ年で、終了後本科に編入できた。予科には九組あり、宋教仁が最後の壬組に入学したのは中途入学であったからである。」
- 66 同上 P126
- 67 片倉芳和『宋教仁研究 清末民初の政治と思想』清流出版 2004 P34
- 68 呉相湘『宋教仁：中国民主憲法憲政的先驅』台北文星書店 1964 P60
- 69 宋教仁『我之歴史』文星書店 1962 P89-296
- 70 片倉芳和『宋教仁研究 清末民初の政治と思想』清流出版 2004 P62
- 71 李錫正「毛沢東の萍郷老師湯増璧」1994-2010 China Academic Journal Electronic Publishing House P28
- 72 埃徳加・ス諾『西行漫記』三聯書店 1979 P122

- 73 周棉『中国留学生大辞典』南京大学出版1999 P116  
江西省萍鄉市政協『中国民主革命的先驅：湯增璧』甘肅人民出版社 2011 P3-21  
張枏，王忍之『辛亥革命前十年間時論選集』第三卷 三聯書店1977 P82-88
- 74 『早稲田大学百年史』第二卷P1104, 1106
- 75 周家堪\_百度百科<http://baike.baidu.com/> 2011, 9
- 76 中国法学網<http://www.iolaw.org.cn/> 2011, 7
- 77 日本現存近代中国法制関連書物データベース <http://www.terada.law.kyoto-u.ac.jp/> 2011, 6
- 78 史海鈞沈憶江南<http://ccd.vpeople.com.cn/> 2011, 6
- 79 法律互聯 <http://www.lawon.cn/html/200681102640-1.html> 2011, 7
- 80 注54を参照
- 81 『早稲田大学百年史』第二卷P1104, 1106
- 82 中国年鑑全文数据库<http://dbpub.cnki.net/> 2011, 6
- 83 『義馬市志』中州古籍出版社 1991 P313
- 84 『清江県志』上海古籍出版社 1989 P534  
『早稲田大学百年史』第二卷 P1104
- 85 『桐城県志』黄山書社 1995 P829
- 86 『霍山県志』黄山書社 1993 P868
- 87 新浪文化-読書『迷惘の諸侯』第一部分 秀才，袍哥，辛亥年（9）<http://vip.book.sina.com.cn/book/> 2011, 8
- 88 『金華県志』浙江人民出版社 1992 P723
- 89 培基学堂<http://www.macadata.com/macauweb/> 2011, 9
- 90 本土信息聯盟網<http://soft.icchina.com/ibsbiz/LocalInfo/> 2011, 9
- 91 樂清維科-詞目搜索<http://www.yqwiki.com/> 2011, 8
- 92 『湖口県志』江西人民出版社 1992 P730
- 93 『汾陽県志』海潮出版社 1998 P975, 976
- 94 『武漢市志 人物志』武漢大学出版社 1999 P162
- 95 紹興市第一中学 百年校史 <http://www.sxyz.net/2009/bnxs/Index.asp> 2011, 7
- 96 『渠県志』四川科学技術出版社 1991 P890
- 97 『松陽県志』浙江人民出版社 1996 P599
- 98 『淳安県志』漢語大詞典出版社 1990 P744
- 99 清朝遂昌县人程景曾留学日本早稲田大学証明書 [http://www.chengshi.org/bbs/Archive\\_view.asp?boardID=6&ID=19588](http://www.chengshi.org/bbs/Archive_view.asp?boardID=6&ID=19588) 2011, 9
- 100 『早稲田学報』大正2年3月10日第217号 P15-16
- 101 安藤彦太郎『未来にける橋 - 早稲田大学と中国-』成文堂 2002 P276
- 102 同上 P4-5

## 参考文献

- 阿部洋『中国の近代教育と明治日本』福村出版株式会社 1990
- 埃德加·斯诺『西行漫記』三聯書店 1979
- 王德堅『海塩県志』浙江人民出版社 1992
- 霍山県地方志編纂委員会『霍山県志』黄山書社 1993
- 片倉芳和『宋教仁研究：清末民初の政治と思想』清流出版 2004
- 川島真『近代中国における物理学者集団の形成』日本橋報社 2003
- 金華県志編纂委員会『金華県志』浙江人民出版社 1992
- 義馬市地方史志編纂委員会『義馬市志』中州古籍出版社 1991
- 景寧畚族自治县志編纂委員会『景寧畚族自治县志』浙江人民出版社 1995
- 湖南省瀘溪県志編纂委員会『瀘溪県志』社会科学文献出版社 1993
- 湖北省地方志編纂委員会『湖北省志 教育』湖北人民出版社 1993
- 湖北省棗陽市地方志編纂委員会『棗陽志』中国城市経済社会出版社 1990
- 江西省湖口県志編纂委員会『湖口県志』江西人民出版社 1992
- 江西省萍鄉市政協『中国民主革命的先驅：湯增璧』甘肅人民出版社 2011
- 呉相湘『宋教仁：中国民主憲法憲政の先驅』台北文星書店 1964
- 実藤恵秀「中国人早大留学小史」早稲田大学東洋文学会 東洋文学研究 (16) 1-27 1968
- 「在本邦清国留学生関係雜纂」日本外務省記録 3 門 -10類- 5 項
- 四川省渠県地方志編纂委員会『渠県志』四川科学技術出版社 1991
- 新郷県志編纂委員会『新郷県志』三聯書店 1991
- 周棉『中国留学生大辞典』南京大学出版社 1999
- 昭平県志編纂委員会『昭平県志』広西人民出版社 1992
- 松陽県志編纂委員会『松陽県志』浙江人民出版社 1996



- 清江県志編纂委員会『清江県志』上海古籍出版社  
1989
- 清徐県地方志編纂委員会『清徐県志』山西古籍出版社 1999
- 浙江省淳安県志編纂委員会『淳安県志』漢語大詞典出版社 1990
- 蘇州市地方志編纂委員会『蘇州市志』江蘇人民出版社 1995
- 宋教仁著・松本英紀訳註『宋教仁の日記』同朋社  
1989
- 張之洞『勸学篇』中江書院 1898
- 趙德馨, 吳劍杰, 馮天瑜『張之洞全集 第六卷』武漢出版社 2008
- 張枬, 王忍之『辛亥革命前十年間時論選集』三聯書店 1960-1977
- 長興県志編纂委員会『長興県志』上海人民出版社  
1992
- 桃源県地方志編纂委員会『桃源県志』湖南出版社  
1995
- 桐城県地方志編纂委員会『桐城県志』黄山書社 1995
- 馮自由『革命逸史』商務印書館 1965
- 汾陽県志編纂委員会『汾陽県志』海潮出版社 1998
- 武漢地方志編纂委員会『武漢市志 人物志』武漢大学出版社 1999
- 松本英紀著『宋教仁の研究』晃洋書房 2001
- 李廉方『辛亥武昌首義記』湖北通志館 1947
- 李錫正「毛沢東の萍郷老師湯增璧」1994-2010  
China Academic Journal Electronic Publishing House
- 劉寿林『民国職官年表』中華書局 1995
- 呂順長『清末浙江与日本』上海古籍出版社 2001
- 早稲田学会『早稲田学報』明治39-42年
- 早稲田大学大学史編纂所『早稲田大学百年史』第2  
卷 早稲田大学出版部1981